慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二〇一一年度エン・ゲヴ遺跡(イスラエル)における発掘調査
Sub Title	Excavations at Tel 'En Gev, Israel, 2011: a preliminary report
Author	杉本, 智俊(Sugimoto, David Tomotoshi) 間舎, 裕生(Kansha, Hiroo)
Publisher	三田史学会
Publication year	2012
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.81, No.1/2 (2012. 3) ,p.191- 224
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20120300-0191

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

二〇一一年度エン・ゲヴ遺跡（イスラエル）における発掘調査

杉本智俊・間舎裕生

1. はじめに

慶應義塾大学イスラエル考古学調査団（団長　杉本智俊）は、イスラエル国ガリラヤ湖東岸に位置するエン・ゲヴ遺跡において二〇〇九年度から考古学的発掘調査を行っている（写真1。Sugimoto 2010、杉本・間舎二〇一〇、杉本・間舎二〇一一参照）。二〇一一年度は、八月一日から三〇日まで現地において調査を行った。結果の詳細な報告・検討は最終報告で行うが、ここでは本年度の成果の概要を速報として報告する。[1]

今年度の調査団の構成は、団長・杉本智俊（慶應義塾大学文学部）、スーパーヴァイザー・間舎裕生（慶應義塾大学文学研究科後期博士課程）、三戸芽（慶應義塾大学文学研究科修士課程）、イド・ヴァクテル（ヘブル大学考古学研究所修士課程）、アシスタント・スーパーヴァイザー・岡田真弓（慶應義塾大学文学研究科後期博士課程）、レジストラー・佐野真奈美（慶應義塾大学文学研究科修士課程）、遺構実測・渡部展也（中部大学人文学部）、遺物実測・平川敬治（福岡市教育委員会）、牧野久実（鎌倉女子大学教育学部）、マネージャー・岡田真弓であった。渡部は地理学的調査、岡田はパブリック考古学的調査を兼任して行った。イド・ヴァクテルは、イスラエル側リエゾンも務めた。この他、慶應義塾大学や東京大学の学生がヴォランティアとして、ドゥルーズ族の労働者が発掘作業補助員として参加した。

本調査団の調査区は、「上の町」と「下の町」の境界にあたると思われる南側斜面（G地区）と遺跡上で最も標高の高い地点（H地区）の二地区に設定されている。

写真１　エン・エヴ遺跡全景

今年度は三年プロジェクトの最終年として、すでに昨シーズンまでに大型建物の存在が確認されていたＨ地区に焦点を絞り、できる限り広範囲を発掘することで、これらの遺構の構造把握を試みた。Ｈ地区では、昨年度までにＢ11、Ｃ９、Ｃ10、Ｃ11、Ｄ10、Ｅ10の６グリッドにおいて調査がなされてきた。今年度はそれらに隣接する地区に五つのグリッド（Ｂ／Ｃ12、Ｂ／Ｃ13、Ｄ９、Ｄ11、Ｄ12）を新たに設定した。また、Ｃ11及びＥ10グリッドでは、昨年に引き続き調査を行った。以下に、上層から下層の順でそれぞれの時代の遺構について報告し、その歴史的意義を検討する。

２．二〇一一年度の調査結果

ａ．表土および表土直下

表土は現代の盛土で、砂利による硬質の層が場所によっては厚さ一〇㎝以上にわたって堆積していた。[2] 表土直下の層からはいくつもの掘り込みが確認されたほか、含まれている土器も鉄器時代からオスマン帝国時代まで多岐にわたっているので、かなりの攪乱を受けていることがわかる。Ｂ／Ｃ12とＤ12から

は石組の墓（L669、L712）が出土した。このような墓はこれまでの調査で初の例であるが、人為物の副葬品はなく、造られた時代の特定は困難だった。

b．第Ⅰ層（図1）

第Ⅰ層は、二〇〇九年度の調査においてC9、C10、D10から出土した二つの遺構（W505＋516、W508＋509）が確認されている。これらの遺構はそれぞれ石一段からなる幅約四〇センチメートルの壁であり、比較的大きな建物の一部であると考えられている。今年度の調査では、D9、D11及びB／C12／13から出土した遺構が第Ⅰ層にあたると考えられる。

D9からは、グリッドの東の畔に沿うように、南北方向の壁W652が出土した（写真2）。出土した標高はマイナス一九九・五〇〇～マイナス一九九・六〇〇メートルで、すでにD10から出土していたW509と同一ものであろう。さらに、W652に取りつく床面（L660）も出土し、直上からはヘレニズム時代の土器が多数検出された。第Ⅰ層の遺構に取りつく床がこれだけ明確に確認できたのはこれが初めてである。このほか、グリッドの南端からは東西方向の壁W667が出土したが、W652よりも標高が高い

写真2　D9第Ⅰ層の床

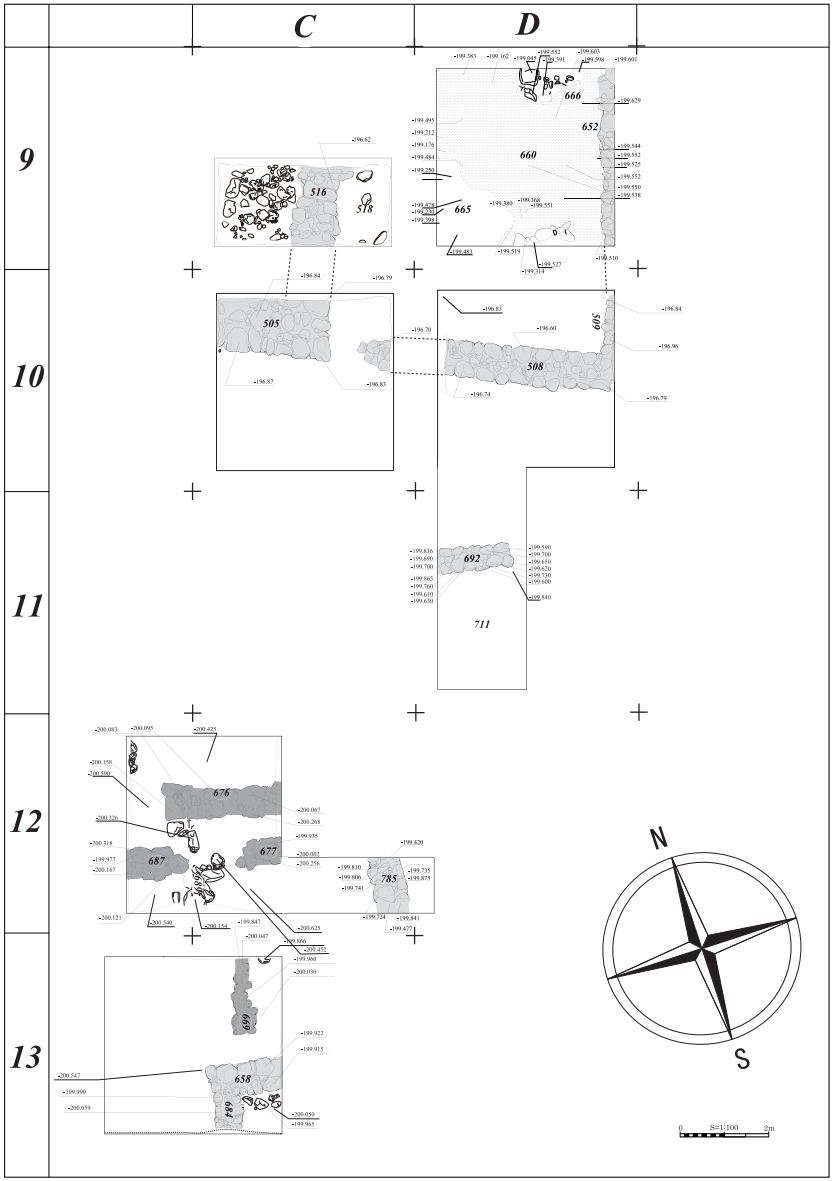

C
D
9
10
11
12
13
516
518
505
508
509
660
652
666
665
692
711
676
677
687
785
658
659
N
S
S=1:100

図１　第Ⅰ層平面図

上、両者は直交しないため、同時期のものとは考えにくい。二〇〇九年度の調査においても、W505＋516とW508との切り合い関係から、第Ⅰ層には二時期あると考えられた。今回のD9の調査結果は、その可能性を裏づけるものといえよう。

調査区の南側のB／C13からは、南北方向の壁W669が出土した。その上端の標高は第Ⅱ層のW658＋684とほぼ同じ（マイナス一九九・八四〇メートル周辺）であるが、石が二段程度しかない点が異なる。W669はW658＋684よりも浅い地点から造られており、W658＋684よりも遅い時代の建築と考えるべきであろう。B／C12でも、不完全な南北方向の壁と思われるW689と二本ないし三本の東西方向の壁W676、W677、W687が出土した（標高マイナス二〇〇・〇〇メートル周辺）。いずれも石一～二段によって構成されているが、W676以外の壁は特に残存状況が悪く、正確な状況は理解できない。W677とW687は同一直線状に位置しており、その延長線上の土にはレンガの堆積が見られたため、本来は一つの壁を形成していた可能性もある。現状では、W676、W687＋677とW689は直交しているように見える。これらの壁の周囲の土（L686、L688、L690）は覆土のみで床は検出されず、土器もほとんど出土しなかった。このため、これらの遺構の使用時期についても正確にはわからないが、W669と合わせて考えると、W658＋684に先行する遺構だと考えられるであろう。

D11からも、標高マイナス一九九・七〇〇メートル周辺から東西方向の壁W692が出土した。しかし、これは長さ約二メートルしか検出されておらず、周囲の調査区からこれと関係する遺構も出土していないので、その性格は不明である。

以上のように、本年度の調査では、調査区北側部分から第一層に属すると思われる明確な床と壁による遺構（D9）が検出された。これは、これまで知られていた第一層の壁と同一の建物を構成していたようである。しかし、それ以外の地区から出土した壁は、一応第Ⅰ層に位置づけられるものの、残存状況が悪く、層位関係は不確実で、遺構の構造も十分把握することはできなかった。

昨年度までの初期報告では、ヘレニズム時代の遺構の下のピット群をペルシア時代のものとし、第Ⅱ層と定義してきた。しかし、このピット群にはヘレニズム時代から鉄器時代の遺物が混在していた。また、その上の土層も一メートル以上の深さがあり、堆積の変化も認められるが、遺構はまったく検出されず、土器もヘレニズム時

代から鉄器時代のものが混在していた。そのため、どの時点からペルシア時代に移ったのかは今年度の調査でも明確に区別することができなかった。これらのピット群はペルシア時代のものであった可能性が高いが、ヘレニズム時代の層位と区別することができないので、本報告では両者を合わせて第Ⅰ層として報告する。結果として第Ⅱ層は、ピット群の下から出土した漆喰の床を中心とした遺構ということになる。

c．第Ⅱ層（図2）

第Ⅱ層に関しては、昨年度までに比較的分厚い漆喰の層と埋土の層が二回ないし三回繰り返し堆積している様子が調査区の北側部分で確認されている。特にC10とD10ではそれらが非常に良好な状態で検出されていた。今年度の調査でも、この漆喰と埋土の層が検出され、特にD9においてその状況を精査することができた。

最も上の漆喰の層（L696）は、標高マイナス二〇〇・一七五メートル付近から厚さ五～七センチメートルで検出されており、直径一・五センチメートル程度の小石が混和材として使用されている。これは床だと考えられるが、二〇〇九年度に検出されたC10及びD10の床と同様、後代の掘り込みによって部分的に破壊されている。この床直上の覆土（L675、L683）からは鉄器時代ⅡB期末の土器が出土している。

L696の下には、褐色の土の層（L710）が約二五センチメートルの厚さで堆積していた。この層から遺物はほとんど出土しないので、これは自然堆積ではなく、漆喰の床を敷くための基礎だと考えられる。このような漆喰の床と埋土の構造はC10やD10でも確認されている。この埋土の下からは第二の漆喰の層（L725）が出土した。L725は、L696に比べて混入している石の直径が大きく多量で、摩耗した土器片を多く含んでいた点が特徴的である。L725の直上には覆土がほとんど確認されておらず、遺物もなかったことを考えると、この漆喰の層は、もう一つの床ではなく基礎の一部だったと考えられる。

これと同様の重層構造はD11とD12からも出土したが、D12では後代の破壊が顕著で、部分的にしか確認できなかった（L719、L721）。一方、D11では上層の漆喰の層（床、L731）と下層の漆喰の層（L769）の間から排水設備（L744）が出土した（写真3）。L744は、平らで粗く整形された石を一列に並べて造られており、その両側には同様の石が板状に立てられていた。幅は約二〇センチ

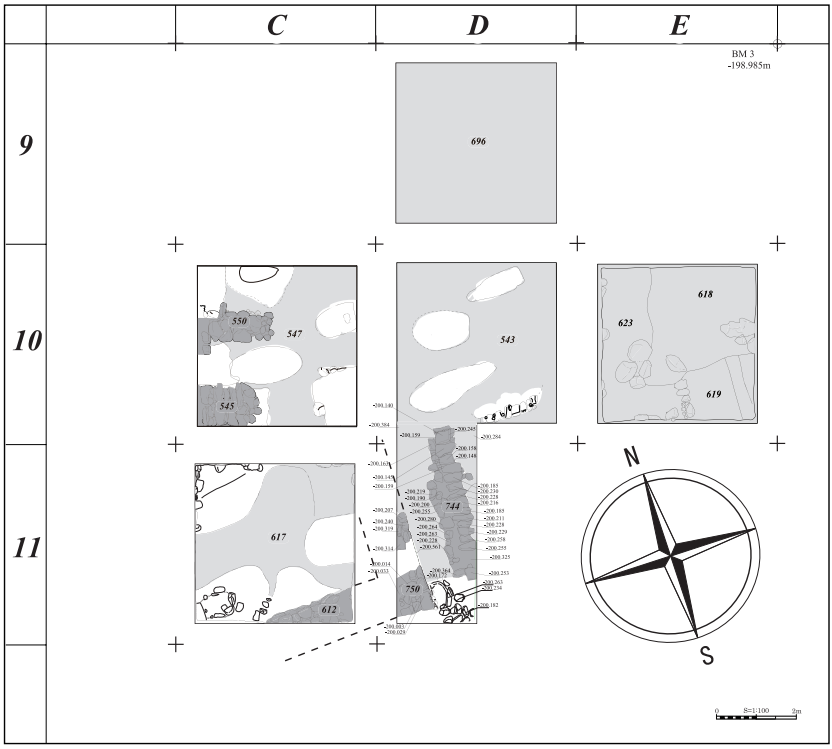

C
D
E
9
10
11
BM 3
-198.985m
696
550
547
545
543
618
623
619
617
612
744
750
N
S
S=1:100
0
5m

図２　第Ⅱ層平面図

a

b

写真３　第Ⅱ層の排水設備（北側から）　a：蓋のかぶさった状態、b：蓋を外した状態

メートルで、矩形の断面をしており、その上部もひとまわり大きな平らな石で覆われていた。全体は、北から南へ向かってわずかに傾斜していた。この設備の上部は上層の漆喰の層（床、L731）と接していたので、その地下に設置されていたものであることがわかる。一方、その下端は下層の漆喰の層（L769）と接していた（写真4）。このことからも、これら二つの漆喰の層は、時期差ではなく同一時期の構造の違いを反映していると思われる。

このほか、D11の南西角付近からは二つの壁（W730、W750）が出土した（写真5）。東西方向の壁W730はおそらくC11出土のW612から連続するもので、W750と直交する。これらの壁は上層の漆喰と接しており、その漆喰の床や排水設備と同時期の遺構だと考えられる。

さらに南側のB／C13の南東角からも、幅約七〇センチメートルの壁でできた遺構W658+684が出土した。これらの壁の基礎は、第Ⅲ層のW709やW767を壊してその下まで達しており、しっかりとしたつくりになっている。また、これら二つの壁に囲まれた場所からは床と思われる硬い面が二面出土した。上層（L659）の標高はマイナス二〇〇・〇六一m、下層（L756）はマイナス二〇〇・六八八mである。W658+684は、二時期にわたって使用され

写真4　排水設備と2枚の漆喰の層（北側から）

写真５　第Ⅱ層の壁（W730、W750）（北側から）

ていたと思われる。この遺構から出土した遺物はほとんどないが、壁の造り方や方向、標高はW730及びW750と共通しており、同時代の建築とみることができるであろう。

同様にB／C12の試掘溝からも、南北方向の壁W785が出土した。幅は約七〇センチメートルで、出土した標高からも第Ⅱ層のW730＋750等と同時期のものと考えられる。遺構の構造は、周囲から同時期の遺構が検出されていないので不明である。

以上のように、第Ⅱ層の遺構、特に漆喰の床とそれに取りつく建物に関する解釈は、昨年度までと比べて大きく変化した。これまでは、上層の漆喰の床と西側斜面の建物が関連しているとの推測のもとに、両者を同一層位中の亜層として扱っていたが、今年度の調査で上の二つの漆喰の層は排水設備やその西側の壁と同時期の床とその基礎であることがあきらかになった。この漆喰の床は、C10、C11、D9、D10、D11、E10と少なくとも六つのグリッドで確認されており、D12でも部分的に知られている。このような広がりを考えると、これはなんらかの公共的な性格を持つ広場か中庭の遺構であったと考えられる。このような理解は、排水溝や壁の上質なつくりからも支持される。

d．第Ⅲ層（図3）

第Ⅲ層の遺構は、テルの西側斜面から出土した大型の建物が中心である（表1参照）。その東側には攪乱が深くはいっており、この層位の遺構は確認できなかった。

この建物に関しては、すでに昨年度の調査で、B11およびC11から幅約一二〇センチメートルの東西方向の壁W582＋633とそれに取りつく石敷574＋575が出土していた。これは、マザールらの調査（一九六一年）で検出されたA13の東西方向の二本の壁（昨年度、W639、W640というローカス番号を付した）とともに、同一の建物を構成しているのではないかと推測された。B11とC11の間の畔からも、W582＋633と直交するような南北方向の壁の側面が露出していたことから、この推測は可能性が高いと考えられた。今年度は、これらの壁をつなぐ部分B／C11～13を調査し、これらは実際に一つの大型建物の一部であることが確認され、その建物がどのような構造になっていたかも明らかにされた。

まず昨年度から側面が露出していた南北方向の壁（W671）の全体像を明らかにするために、B11とC11の間の畔を取り外した[3]（写真6）。W671はW582＋633と直角に接しており、一つの建物の東西方向の壁と南北方向の壁であることが確認された。W671はW582＋633より北側には延長しておらず、南北方向の壁はここが北端だったようである。しかし、これらはひとつの構造になっておらず、W671は後づけのものであり、最大四〇センチメートルほど上端の標高が高いことがわかった。基礎の深さに関しても、W671は石二段分しかないのに対し、W582＋633は下端が検出できないほど深い位置から造られていた。

B／C12とB／C13からは、W671から連続する南北の壁W734＋737＋709と、それに取りつく東西の壁W733、W773、W767が出土した（写真7。標高はそれぞれ約マイナス二〇〇・五〇〇～六〇〇メートル）。W767以南からは壁が出土していないので、W767が南端にあたると考えられる。W582＋633が北端であることとあわせて考えると、この遺構は単に市壁の一部というよりも、独立した大型建物だったと考えられる。建物は、南北約一五メートルの大規模なものだったことになる。それぞれの壁の幅は約一二〇センチメートルで、同一規格によって建設されたことがほぼ確実である。また、W773とW767はそれぞれマザールらが検出したW640、W639の連続であり、長さは一五メートル以上、おそらく二〇メートル程度、基礎の深さも二メートル以上になる。このことは南北の壁の深さが一

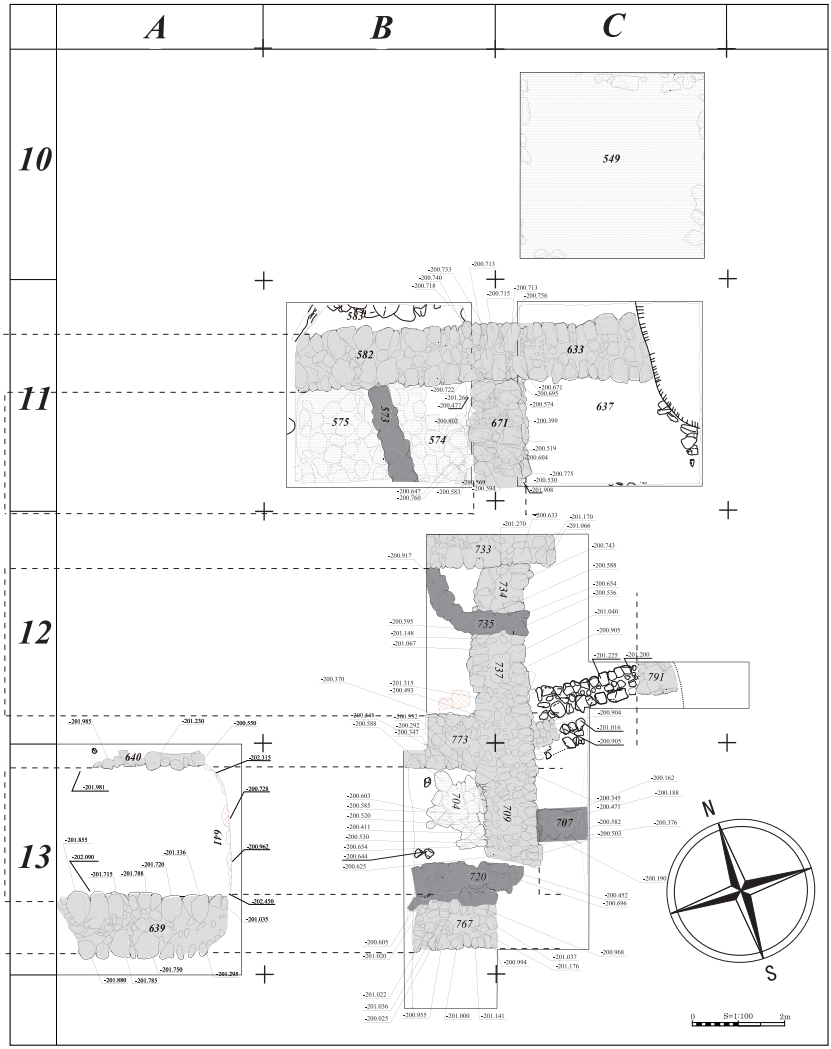
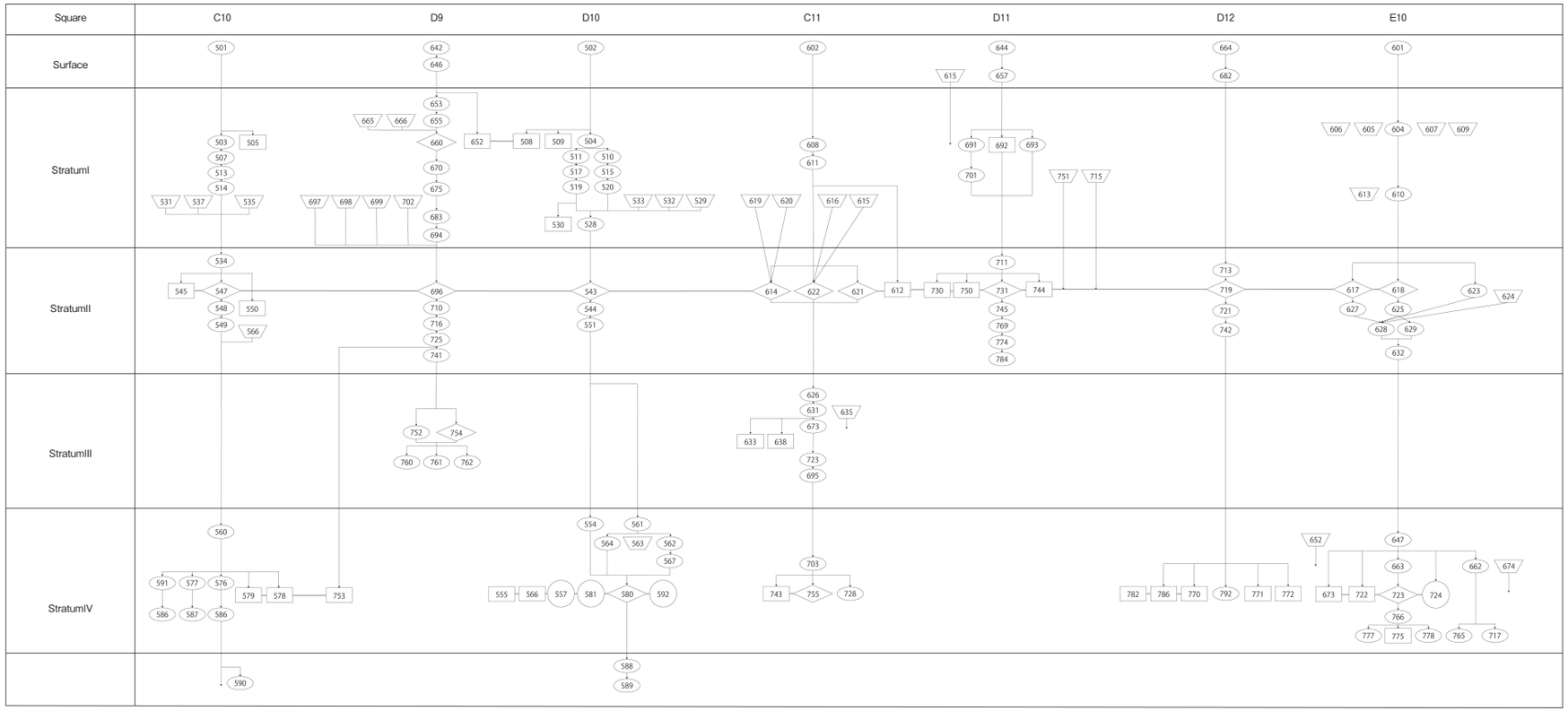

A
B
C
10
11
12
13
549
583
582
633
575
573
574
671
637
733
734
735
737
791
773
704
706
707
720
767
640
641
639
N
S
0
S=1:100
2m

図３　第Ⅲ層平面図

表１　西側建物を中心とした　　層位概念図



メートルにも満たない点と対照的である。こういった様相はW582＋633とW671との関係と共通する。

建物南側のW709、W773、W767で囲まれた部分はおそらく部屋になっていたと考えられ、石敷704が出土した。同じ石敷の断面は、マザールらの調査区（A13、昨年度L641というローカス番号を付した）からも確認されている。石敷704は平坦ではなく、W709の石敷の上に乗りあがっている部分もあるが、これはおそらく後代の掘り込み（L700、L787）や木の根が入り込んで破壊されたためであろう。A13の断面を見ると、この石敷きの下に一メートル以上の土砂が埋土として入れられていたことがわかる。これと同様の石敷きは、この建物北側部分からも昨年度確認されており（石敷き545＋544）、その下にも埋土があったことが知られている。

これらの状況から判断すると、おそらく東西方向に四本走る幅約一二〇センチメートルの壁はテルの西側斜面をかさ上げするための土盛り工事の擁壁として最初に造られ、その上に第二段階として南北方向の壁が設置されたものと思われる。[4] もしこの仮定が正しいとすると、四本の東西の壁のさらに西側に南北方向に走る壁が必要だったはずである。そのような壁は、我々の調査によってもマザールらの調査によっても検出されていないが、キブツの人々が水道工事をした際、遺跡西側の道路の下から南北方向の大きな石の壁を発見している。その写真も残っている（写真8参照）ので、この推定にはそれなりの根拠があるといえよう。このようにかさ上げされた建築は、防御施設としての威容を示す役目を果たしていたであろうが、その上には独立した建物が立っていたと思われる（以下参照）。そうすると、これら東西方向の壁と南北方向の壁の高さのずれは、時期の違いよりも工法の手順の違いを反映していると考えることができるであろう。

W733とW773に関しては、W582＋633と同様、南北の壁の下を通ってさらに東まで続いていたことがあきらかになった。これら二つの壁の東端も、W633の東端同様、破壊されていて残っていないが、建物はさらに東側へ続いていたと思われる。これらの壁は控え壁のような形でつきだしていた可能性もあるが、この建物の西側と合致するように三つの部屋があった可能性もある。その場合は、C11の試掘溝から出土した南北方向の壁W791がこの建物の東側を閉じていたと推定できるであろう。

また、W773の北面を詳しく調査したところ、上部二段

写真６　B11-C11の壁（W582＋633）とそれと直交する南北の壁（W671）（東側から）

写真７　第Ⅲ層南北方向の壁（W671＋734＋737＋709）と4本の東西方向の壁（南側から）

写真８　テル西側道路下の壁（南側から。写真提供エルダド・ベン・ヨセフ氏）

には直径四〇センチメートルほどの石が使用されているのに対し、三段目以下は比較的小さな石が使用されていることがわかった。W773の北側には大きな平らな石が二枚、段差をなして敷かれていた。構造から考えて、階段だったと思われる。

建物北側のW734+737からは、北西へ向かって弧を描くように曲がった壁W735が出土した。W735の幅は約五〇センチメートルで、一～二段の石で構成されている。W735がW734+737に取りついている部分は、大きくえぐられたようになっているので、後代にW735が南北の壁（W734+737）に加えられたことを示している。その北側にあるB11の石敷き（L574+575）の上にも、よく似た壁W573が載っている。標高は異なるが、これも二次的な改変だと考えられる。

同様に、建物南側の石敷き704にも、後代になって東西方向の壁W720が加えられている。W720はW767の北辺に沿って平行に造られているが、あきらかに石敷きの上にのっており、南北の壁（W709）をその南端部分で壊しているので後代の改変だと考えられる。W709の東辺にも、東西方向の壁W707が加えられている。W707はW709の上端に接するように取りついているが、調査では一メートル程度の長さしか検出できなかったためにその構造は不明である。南北の壁の最も南側部分（W709の部分）の表面には、直径一〇～一五センチメートルほどの小石が敷かれていた。こうした構造はこの連続した壁のより北側部分には認められないので、この部分も後代に改修された可能性がある。

以上をまとめると、これらの遺構は東西一五メートル以上、おそらく二〇メートル程度、南北約一五メートルの大型建築だったと考えられる。南北方向の壁は、W582+633より北には連続しておらず、W767より南にも連続していない。内部には、壁によって約四メートル間隔（内径）で仕切られた三つの部屋が存在し、南北両端の部屋には石敷きがあった。東西方向の壁（W582、W733、W773、W767）は南北方向の壁よりも東に突き出していた。これらは控え壁のようになっていた可能性と、さらに東側に建物を閉じる壁が存在し、その間に西側部分と対応する三つの部屋があった可能性が考えられる。

つまり、この建物の基礎部はテル西端にそそり立つように入れられた盛り土の擁壁として機能していたが、単なる防御用の市壁ではなく、その上に独立した大型建築、おそらく公共建造物が建っていたものと考えられる。こ

のことは石敷きの存在や建物が独立していたことが示している。また、改変作業の様子から判断すると、そのような作業を必要とするぐらい長い期間用いられており、少なくとも二時期に分けることが適当だと考えられる。

これらの壁にとりつく床は石敷き（575＋574及び704）の他検出されておらず、包含遺物も少量なので、遺構の正確な使用時期は特定できない。しかし、この下の第Ⅳ層が前一一―一〇世紀のものであることは土器や放射性炭素年代から知られており、[5] この上にもう一層、アッシリアによる攻撃の直前（前八世紀）の層（第Ⅱ層）が存在することを考えると、この第Ⅲ層は前九世紀を中心とした層だと判断することが妥当であろう。改築があったことを考えると、その使用期間は短くなかったはずである。

e．第Ⅳ層（図4）

第Ⅳ層に属する遺構としては、昨年度までに「調理場」と思われる部屋がC10およびD10で確認されていた（写真9）。特にD10では、三基の竈とそれに伴う床（L580）、その上から大量の土器や植物遺存体が原位置を保った状態で出土した。[6] 今年度は、この「調理場」遺構の周辺から複数の部屋が出土し、それらを含む大きな建物の外壁も検出された。建物の外壁は、幅約一八〇センチメートルの堅固なもので、おそらく公共建造物だったと考えられる。この建物は、第Ⅲ層の公共建造物とはまったく異なるプランで建てられていた（表2参照）。

建物の外壁は、まずC11から、幅約一八〇センチメートルの南北方向の壁W743が出土した（写真10a）。その北端は第Ⅲ層のW633によって破壊されているが、これまで出土したどの壁よりも厚いものである。D12でも、同じく幅約一八〇センチメートルの東西方向の壁W786が出土した（写真10b）。これはB／C13出土のW782に連続すると考えられる。この壁の南側は、階段状に二段下がっていた。W743とW782＋786の交点は検出されていないが、これらは直交すると推測され、大型建築の一部をなしていたと考えられる。残念ながら、W786とW782の北側は残存状況がよくなく、明確な床は確認できなかった。

D12の東端では、W786と直交すると思われる壁W772が検出された。またW786の北側（おそらく建物の内側）からは、それと平行する壁W771が出土した。しかし、W771とW786の距離は二メートル程度しかなく、これらの関係はよくわからない。

この建物の北側部分では、「調理場」遺構D10の東の

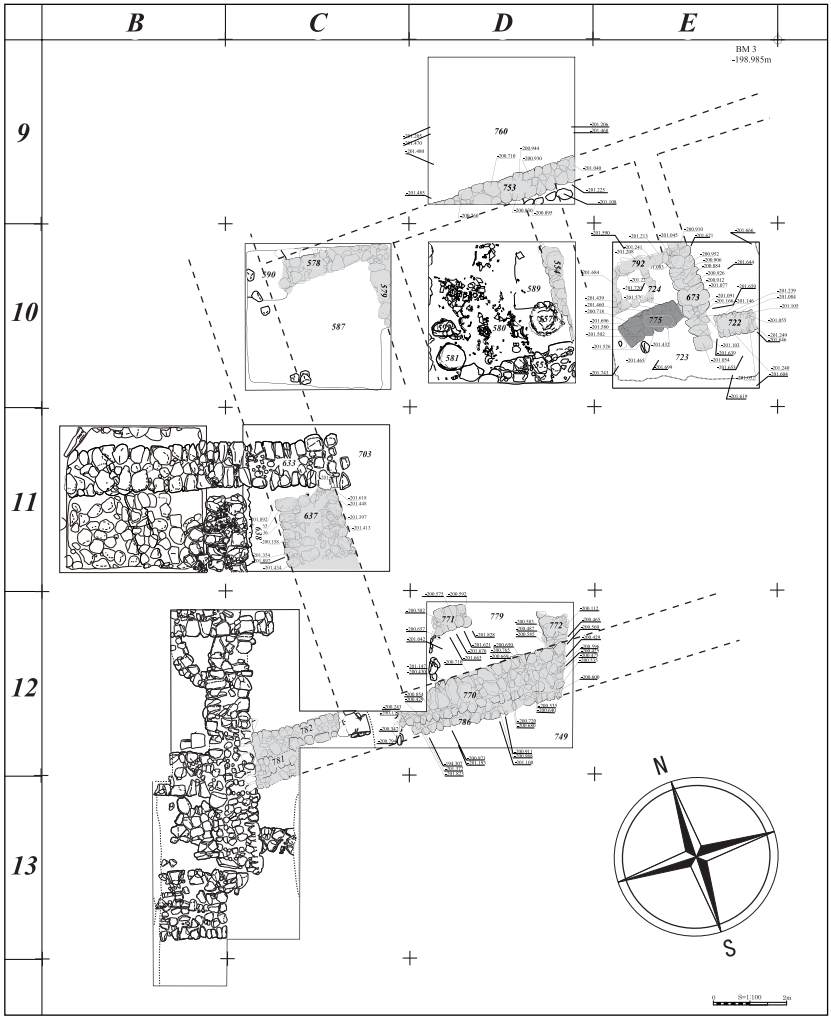

B
C
D
E
9
10
11
12
13
BM 3
-198.985m
760
753
578
590
587
589
580
581
792
724
673
775
722
723
703
633
637
771
779
772
770
749
786
782
781
N
S
0
S=1:100
2m

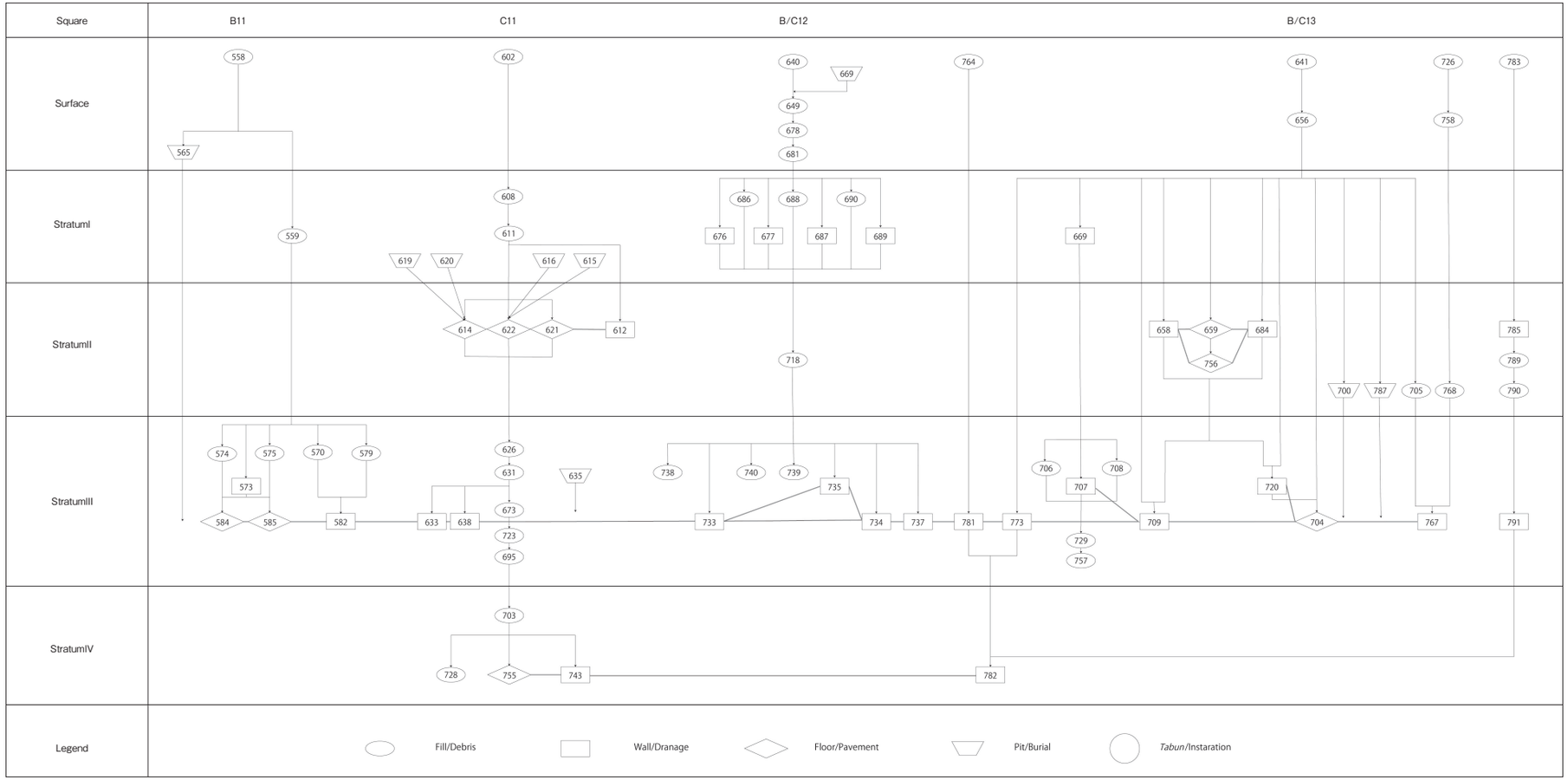
図４　第Ⅳ層平面図

写真９　2010年度に発掘された「調理場」遺構（D10）

E10からW554と平行に走る南北方向の壁W673が出土した（図4）。上端の標高はマイナス二〇〇・九〇〇メートル付近であり、W554と同一である。さらにグリッドの北端からはW673に直交する東西の壁W792が出土した。W673とW792に接する床（L723）の標高はマイナス二〇一・三〇〇メートル付近であり、D10のL580の標高と一致する。ここからは完形の調理鍋一点と擂り石が数点検出されている。また、グリッドの北西角からは床に掘り込まれた円形の石組み設備（L724、写真11a）が出土した。この設備からはほとんど土器が検出されず、機能は不明であるが、鉄製の斧が出土した。W792は畔に入り込んでいるために全体像は不明であるが、W554と直交すると思われる。したがって、L723は「調理場」と考えられるL580の東に隣接する部屋で、やはり調理と関係する機能をもっていたと考えられる。

さらに、L723を掘り抜いたところ、別の東西方向の壁W775が出土した(写真11b)。W775はW673の下に入り込んでいることから、これらよりも前の時期のものだと考えられる。この周辺からは後期青銅器時代～鉄器時代Ⅰ期の型式の調理鍋や二色彩文土器の土器片が出土しており、この遺構の始まりが少なくとも鉄器時代Ⅰ期にまで遡る

表２「調理場」遺構を中心とした　　層位概念図



ことを示している。しかし、この層の調査面積は小さく、これらの壁の角度から考えると、同一建物の建て替えによる変化の可能性もあるため、ここでは第Ⅳ層の亜層として報告する。

Ｄ10の北側のＤ９からは、グリッド南面に沿って東西方向の壁Ｗ753が出土した。Ｗ753は下端を検出できるまで掘り下げることはできなかったが、少なくとも四段石が積まれていた。壁の南側からは、小さい面積ではあるが、石敷きのように平坦な石が並べられていた。Ｗ753はＷ555やＷ792と平行関係にあり、おそらくＣ10出土のＷ578と繋がるものであろう。

Ｂ／Ｃ11のＷ743の東側には大きな攪乱が入っていたが、[7] その攪乱の下から検出された床（Ｌ703）の直上では、完形の調理鍋を含む大量の土器や擂り石（下石を含む）、炭化物が検出された。Ｌ703の標高は、昨年度Ｄ10で検出された調理場の床Ｌ580やＬ723と等しく、同一建物のＬ580と関係した部屋であったと思われる。遺物の性格からすると、Ｌ703も調理場の続きであったのかもしれない。

以上のように、第Ⅳ層でも大規模な建物、おそらく公共建造物の存在が明らかになった。これらの壁はほぼ正確に方位に従って造られており、地形に合わせて建設された第Ⅲ層の建物とはプランも異なっている。この建物からは、昨年度複雑な図像が印刻された印章が出土した（写真12）ほか、今年度も金属器やビーズが出土しており、包含している土器も大量である。この層の年代は、土器や放射性炭素分析から前一一―一〇世紀のものであることがすでに知られており、今回出土した土器もそれと合致している。非常に遺物の少ない第Ⅲ層と比べると、第Ⅳ層は生活面を保った状態で突然廃棄されたものと推定される。このことも、第Ⅳ層から第Ⅲ層への変化を考える上で重要な要素となるであろう。

３．調査結果に基づく時代毎の都市の様相と歴史的意義

上述の通り、今年度のエン・ゲヴ遺跡における発掘調査では、鉄器時代の三つの異なる時期（前一一―八世紀）から大型の公共建造物の存在を確認することができ、その構造もある程度把握することができた。また、ヘレニズム時代の生活面も明確に捉えることができた。以下では、これらの事実記載に基づき、四つの時代毎にエン・ゲヴに存在した都市の性格について考えられることを整理しておきたい。

a

b

写真10　第Ⅳ層大型建物の外壁　a：W743（写真右側、西側から）b：W786+782（南側から）

a

b

写真11　E10の遺構　a：円形の石組み遺構（L724）　b：「調理場」遺構よりも下層の壁（W775）

写真12　D10から出土した印章

a．最下層の第Ⅳ層では、鉄器時代Ⅰ期（前一一世紀？）から鉄器時代ⅡA期（前一〇世紀）にかけて、幅一・八メートルの壁に囲まれた大型の建築が存在したことが確認された[8]。外壁に関しては、西側部分と南側部分が検出され、特に南側の壁は階段状になっていたことがわかった。また、その内側には、より細い壁によって区切られた複数の部屋が存在したことが判明した。そこに「調理場」遺構があったことは昨年度から知られていたが、同じ性格の遺物はC11やE10でも確認され、昨年度出土したC10の遺物と同列に考えることができると思われる。調理場施設は、それ自体かなり大規模なものであったことが推定される。残念ながら、本調査の調査面積は小さいので、この建物の全体像はあきらかにならなかったが、これが大型の公共建造物の一部であったことは疑いないであろう。

この層の遺物は原位置で出土しており、これらの遺構は突然破壊され、放棄されたものと考えられる。次の時代（第Ⅲ層）の遺構がまったく異なるプランとなっていることを考えると、おそらく異なる人々の攻撃によってこの時代の建築は破壊され、その上にまったく新しい都市が築かれたものと推察される。旧約聖書は、ダビデによるイスラエル統一王国建設時のガリラヤ湖東岸地方にゲシュルという国が存在したことを記している（Ⅱサムエル記三・三。ヨシュア記一二・四―五も参照）。本調査の結果は、イスラエルにおいて国家建設がなされる前（前一一世紀）から、この地方にこれだけの大型建築を建設できる国家が存在していたことを示しており、これがゲシュル人と関連していた可能性は非常に高い。

かつてM・コハヴィは、エン・ゲヴ遺跡を聖書のアフェクと同定し、それは前一〇世紀にゲシュルの町として始まったという見解を示した（Kochavi 1991; 1992）。また、コハヴィは、ゲシュルの町は最初にテル・ハダルに前一一世紀に建設され、テル・ハダルが衰えた前一〇世紀になってエン・ゲヴ遺跡に中心が移ったとも論じた（Kochavi 1992）。しかし、本調査の結果は、テル・ハダルにおいて城壁と倉庫のある町が存在していた前一一世紀に、すでにエン・ゲヴにも強力な都市が存在したことを示している。別のゲシュルの都市の存在が知られているベト・サイダ遺跡の調査成果とも合わせ、ゲシュル王国がどのような政治形態を取っていたのかを考える上で十分考慮すべき結果であろう。

この層からは多量の遺物が出土しており、それもゲシ

ユル人の性格や物質文化を理解する上で貴重だと考えらえる。すでに筆者の一人は、調理場遺構から出土した大型で複雑な宗教図像が描かれた印章を分析し、新ヒッタイト文化の影響を論じている（杉本二〇一一）。本年度の調査では、さらに金属製品やビーズ等の装飾品が出土しており、これらもこの時代の文化を理解する上で興味深い資料である。

b．第Ⅲ層では、テル北西斜面に大規模な土盛り工事をして基礎を造った大型建物が確認された。この建物は防御の役を果たしていたと思われるが、同時に独立した公共建造物であったと考えられる。その東側部分には攪乱が深く入っており、遺構を確認することはできなかった。この層の建築は第Ⅳ層の建物を壊して異なるプランに則って建てられているので、まったく新しい町が建設されたことを示している[9]。また、この建物には改築の跡が見られることから、少なくともそれを必要とするほどの期間継続使用されたと考えられる。

残念ながら、これらの遺構からは出土層位の確実な遺物が少なく、年代を決定することがむずかしい。直上まで攪乱が入っていた箇所が多いせいもあるが、おそらく廃棄された時点でかなりのものが持ち去られたためだと考えられる。この点では、日本の合同調査隊が検出した列柱式建物でも遺物が極端に少なかった状況と比較できるかもしれない[10]。しかし、第Ⅳ層がほぼ確実に前一〇世紀以前のものであり、次の第Ⅱ層が前八世紀の遺構であるので、この層位は前九世紀を中心としたものと考えて間違いないであろう。

ヘブル語聖書では、ダビデの治世以降ゲシュルに関する言及は見られなくなり[11]、ゲシュルは南下してきたアラムの支配下に入った可能性が高い。マザールらによる発掘調査では、第Ⅲ層（前九世紀）[12]からアラム語の銘文の刻まれた土器が出土しており、少なくとも、それ以前にアラムの支配下に入っていたはずである。そうすると、この層の建築はアラム人のものということになる。これまで、ダマスカス以南の鉄器時代の遺跡はほとんど発掘されていないので、この遺構は最初期のアラム・ダマスカスの文化を知る上で重要な遺構になるであろう。この層からは、テル・ハダルやテル・キンロートなどの遺跡でも確認されているガリラヤ湖沿岸地方の遺跡に独特なアンフォラ形の貯蔵壺も出土している。今後、これらの遺物は周辺遺跡との関係も含めて詳細に検討され、その性格をあきらかにする必要がある。

ヘブル語聖書（Ⅱ列王記二〇章など）には、一時イスラエルがこの場所を攻め落としたことが記されているが、それは考古学的に確認はできない[13]。しかし、Ⅰ列王記二〇・三〇で、敗走したベン・ハダドが「城壁のある町」アフェクに逃げ込み、その城壁が崩れて滅んだと記されている点は興味深い[14]。今回の調査であきらかになった土盛り工事を伴った大型建物はテルの周囲にそそり立つ防御施設となっており、当時の人々に強烈な印象を与えたはずだからである。日本の合同調査隊が発掘したケースメート式城壁が、これまでイスラエルで検出された中で最大幅を誇るものであることと考え合わせると、こうした防御施設の印象がこの記事の背景にあったのかもしれない。

c．第Ⅱ層では、調査区の北側部分が全面的に漆喰の床で覆われるようになっており、少なくとも東西南北それぞれ一五メートル以上の広がりをもっていたことがわかった。この漆喰の床は、漆喰の層と土層を二重に重ねて造った上質なもので、その間には排水溝も据えられていた。おそらく公共的性格の強い中庭だったと考えられる[15]。

この漆喰敷きの中庭の南側には、いくつかの建築が確認されたが、第Ⅳ層や第Ⅲ層の建築と比べると貧弱に造られていた。この層から出土する土器は、イスラエル北部の鉄器時代ⅡB期末に典型的な土器で、アッシリアによる襲撃直前の前八世紀の層と考えて間違いないと思われる。日本の合同調査隊の層位と関連づけると、第Ⅲ層を下層列柱式建物、第Ⅱ層をより小型の上層列柱式建物と結びつけられるかもしれないが、この点については、今後それぞれの層の遺物を詳細に研究し、吟味したい。

d．第Ⅰ層の遺構に関しては、今年度の調査で初めて確実な床と土器を伴う建物が検出された。このことにより、昨年度までにすでに知られていた第Ⅰ層の壁がヘレニズム時代に属するものであることが確実になり、その時期にエン・ゲヴ遺跡にかなりの居住があったことが確認された[16]。調査区の南側にも、一応第Ⅰ層に帰属させられる壁がいくつか検出されたが、これらの残存状況はよくなく、性格もよくわからない。

漆喰の床の下の土層の堆積は、鉄器時代の層（第Ⅱ層）に至るまでかなりの深さ（一メートル以上）があった。しかし、明確な遺構は認められず、土器もヘレニズム時代から鉄器時代のものが混在しているので、本報告では第Ⅰ層の中に含めている。ペルシア時代の土器もか

なりの量が含まれているので、その時代の居住はあったと思われるが、あきらかにペルシア時代に属すると判断できる土層や遺構は存在しない。

4. まとめ

以上概観してきた通り、二〇一一年度のエン・ゲヴ遺跡における発掘調査では、鉄器時代に三つ、ヘレニズム～ペルシア時代に一つ、明確に区別される建築層があったことが確認された。三年プロジェクトの三年目にふさわしく、ガリラヤ湖東岸地域における都市の発達史を理解する上で重要な編年的枠組みを捉えたといえるであろう。

南レヴァント地方では、鉄器時代Ⅱ期の初めから、イスラエル王国を始め複数の新しい王国が建設されたが、ガリラヤ湖東岸地域では、それに先駆け前一一世紀からすでに大きな公共建造物を伴う都市が建設されていたことがわかった。この変化には、ゲシュル王国が関係していた可能性が高い。この点については、今後さらに詳細に出土資料を検討していきたい。その後この都市は、鉄器時代の間に少なくとも二回全面的に建て直されている。アラム人の活動との関係も含め、今後その原因を厳密に検討する価値がある。本報告には、まだ土器等の出土遺物の検討が含まれていないが、それぞれの時代の物質文化を理解する上で、これらの検討も重要になってくる。今後、三年間の発掘調査の最終報告の作成に向けて、こうした作業に取り組むことにしたい。

参考文献

Aharoni, Y. 1979 *The Land of the Bible: A Historical Geography*, Revised and Enlarged edition, Philadelphia

Kochavi, M. 1991 “The Land of Geshur Project 1989-1990. Notes and News,” *Israel Exploration Journal* 41, 180-184

Kochavi, M. 1996 “The Land of Geshur: History of a Region in the Biblical Period.” *Eretz Israel* 25, 184-201

Mazar, B., Biran, A., Dothan, M. and Dunayevski, I. 1961 “Ein Gev Excavations 1961.” *Israel Exploration Journal* 14, 1-33

Nun, M. 1991 *The Sea of Galilee: Water Levels, Past and Present*, Kibbutz Ein Gev

Sugimoto, D. T. 2010 “Tel ‘En Gev: Preliminary Report,” *Hadashot Arkheologiyot* 122

杉本智俊　二〇〇五「エン・ゲヴ遺跡（イスラエル）の成立年代」『オリエント』第四八巻第二号、一―二七頁

杉本智俊　二〇一〇「ゲシュルの地と新ヒッタイト文化」月本昭男他編『エン・ゲヴ遺跡―発掘成果報告一九九八―

二〇〇四』リトン、一九五―二三八頁
杉本智俊　二〇一一「エン・ゲヴ遺跡出土の宗教的モチーフの描かれた印章」『オリエント』第五四巻第一号、四三―五八頁
杉本智俊・間舎裕生　二〇一〇「二〇〇九年度エン・ゲヴ遺跡（イスラエル）における発掘調査」、『史学』第七九巻第一・二号、八七―一一四頁
杉本智俊、間舎裕生　二〇一一：「二〇一〇年度エン・ゲヴ遺跡（イスラエル）における発掘調査」『史学』第八〇巻第一号七一―八九頁
長谷川修一　二〇〇九「アフェク（列王記上二〇章、下一三章）とエン・ゲヴの同定」月本昭男他（編）二〇〇九『エン・ゲヴ遺跡――発掘成果報告　一九九八―二〇〇四』リトン、一八三―一九四頁
牧野久実　二〇一一「エン・ゲヴ遺跡出土のヘレニズム土器―二〇〇九年度再発掘H地区資料を中心に」『オリエント』第五四巻第一号、一五八―一八一頁

註

（1）本報告は慶應義塾大学次世代研究プロジェクト推進プログラム及び文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）による成果の一部である。原則として、発掘調査自体は次世代研究プロジェクト推進プログラム資金で行い、出土品の記録、分析等には科学研究費補助金を用いた。

（2）特にB／C13の一部とD12の表土は人力で掘るのが不可能なほどに硬質であったため、削岩機を使用して表土を取り除いた。

（3）この壁に対しては昨年度W638というローカス番号を付したが、今年度精査するに際して改めて番号を付した。

（4）この点に関しては、B・マザールもA13で検出した壁について同様の可能性を指摘している。*Mazar et al.*: 15参照。この工法は、日本の合同調査隊（「聖書考古学発掘調査団」）がテル東端で発掘したケースメート式城壁とも似た点があるが、その比較は改めて行いたい。

（5）昨年度までの初期報告（杉本・間舎　二〇一一）及びそこから出土したスタンプ印章に関する論考（杉本　二〇一一）を参照されたい。

（6）ただし、この遺構に関しては、L580が取りつく二つの壁（W554、W555）の下場の標高が異なり接していないことや、C10から出土した炭化物や植物遺存体とL580の関係をどう考えるかなど、未解決の問題があった。

（7）この攪乱によってW633も破壊されている。

（8）この時代の層は、B・マザールらの調査の最下層（A地区第V層）で確認されているが、その始まりは彼らの想定した年代より若干早まるかもしれない。また、日本の合同調査隊の発掘でも、この時代の遺物が存在することはすでに杉本が指摘していた（杉本　二〇〇五）。下層列柱式建物の下で確認されたローカス510がこの層位に当たるのかもしれないが、今後相互の厳密な層位学的検証が必要になるであろう。

（9）テル周囲の防御施設が第Ⅲ層の建設ということになると、第Ⅳ層の町に市壁があったのかどうかは不明となる。

ただ、検出された大型建物を見ると、市壁があったとしてもおかしくはない。B・マザールらが第V層で検出した中実壁がこれに当たるかもしれないが、この点に関しては今後検討が必要である。

(10) 興味深いことに、日本の合同調査隊が発掘した列柱式建物もこの層の建築と同じ方向を向いている。

(11) たとえば、I列王記二〇章やII列王記一三章の戦いでは、ゲシュルが期待されるのに言及されなくなっている。

(12) 発掘者の年代によると、前八八六―八四一／八三八年頃。

(13) 第III層と第II層には、建て替え作業が確認されるので、これらのどれかが政治的変化と関連していた可能性は否定できないが、それを証明するものは何もない。聖書記事の史実性を受け入れたとしても、そのような政治的な変化が建築上の変化をもたらすかどうかは確かでない。

(14) エン・ゲヴ遺跡とアフェクの同定は確実でない。Y・アハロニ（1979: 335, 344, 381）やコハヴィ（1996）はそのような立場を主張しているが、状況証拠のみに立脚しており、聖書記事の史実性の問題もあるからである（反対意見として、長谷川　二〇〇九等）。しかし、仮にこれらの聖書記事が歴史的事件を反映していなかったとしても、当時の人々にとってアフェクは強力な城壁のある町だという印象があったからこそ、このような物語が記された可能性は高いであろう。

(15) 昨年度までの調査では、第III層と第II層の関係が不確かであったが、本年度の調査で三層見つかっていた漆喰の層の最上層のものが第II層の床、中層のものがその基礎、最下層のものは、より限定された範囲にだけしか認められず第III層と関連することが解明できた。このことにより、全体として整合性をもってエン・ゲヴ遺跡における鉄器時代の層位を理解することができるようになった。

(16) ただし、牧野（二〇〇一）は、この層から出土する土器に前二世紀以降のものが非常に少ないことをすでに指摘している。この居住は、ヘレニズム時代の途中で終了したようである。ローマ時代には、エン・ゲヴ遺跡の東側にヒッポスという大きな遺跡が存在したが、同時期のエン・ゲヴ遺跡の居住は確認できない。ワルシャワ大学のヨランタ・ムリナルチェク Jolanta Młynarczyk は、ヒッポスの外港がエン・ゲヴではなく、その南側の湾にあった港周辺の集落（Nun 1991: 11参照）に移動していた可能性を指摘してくれた（個人的な会話）。この湾周辺で発掘調査はなされていないが、ローマ時代の土器片はかなり採集されている。